

支え合う子どもを育てる支援の在り方に関する研究

- ソーシャルスキル教育の実践を通して -

太良町立多良小学校 教諭 北原 智大

要 旨

本研究は、支え合う子どもを育てる教師の支援の在り方を探ることを目標にして行った。始めに学年全体に、構成的グループエンカウンターを用いて感情の交流を図った。その後ソーシャルスキル教育で対人関係のもち方について具体的に身に付けさせた。その結果、日常生活の場面でも子ども同士の交流が促進され、友達に対する意識が変容し、クラスを越えて友達関係に広がりが見られた。ソーシャルスキル教育を、児童の実態に応じて学年全体で実施することは、子どもの関係を広げたり深めたりし、互いのよさを認め支え合う子どもを育てることに有効であることが分かった。

<キーワード> ソーシャルスキル教育 人間関係 交流の広がりと深まり

1 主題設定の理由

豊かな人間性は、人間関係の中ではぐくまれる。しかし、最近、都市化、核家族化、遊び集団の変化が進み、人間関係が希薄化し、人間関係の築き方や維持の仕方を学ぶ機会が減少してきた。その結果、友達との関係をうまく築くことができず、ストレスを感じている子が増えてきている。社会で生きていく上で人とのかかわりは欠かせない。円滑に人間関係を築いたり維持したりする能力を身に付ければ、様々な対人関係におけるストレスや葛藤も適切に対応できるようになる。つまり、人とのかかわり方を身に付けさせることは、豊かな人間性をはぐくむ人間関係を築く上で重要なことであると考え。学校において、人間関係を築いたり維持したりする力を身に付けさせる取組みは、今まで学級の中で行われることが多かった。しかし、子どもたちの人間関係は学級だけにとどまらない。

そこで、本研究では、より多くの人とのかかわりが可能になるように学級の枠をはずし、学年全体の人間関係をとらえながら、児童理解を図り、望ましい人間関係を築くための適切な支援の在り方を明らかにしたいと考える。学年全体に、人間関係を築くのに必要な知識や技能を身に付けさせるソーシャルスキル教育を行うことで、よりよい人間関係を多くもつことが可能になり、互いのよさを認め支え合う子どもが育つであろうと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

子どもの対人関係の実態を調査し、望ましい対人関係を築くための体験をさせることを通して、支え合う子どもを育てる支援の在り方を探る。

3 研究の仮説

子どもの実態を踏まえ、構成的グループエンカウンターの手法を取り入れた心と心のふれあいの機会をもたせ、更にソーシャルスキル教育を継続的に行えば、対人関係に関する知識や技能が身に付き、相手の気持ちを理解したり、自分の意思を伝えたりすることができるようになり、互いによさを認め支え合う子どもが育つであろう。

4 研究の内容と方法

先行研究や文献からソーシャルスキル教育を用いた人間関係作りについての理論研究を行う。

人間関係に関する児童の実態及び学級の満足度を調査し、分析を行う。

ソーシャルスキル教育を用いた授業実践(第4学年2クラス)を行い、仮説を検証する。

(構成的グループエンカウンター(以下S G E)をクラス間交流のために活用する)

研究の成果と課題をまとめ、ソーシャルスキル教育の年間計画を作成する。

5 研究の実際1(実践化への手立て)

表1 Q-Uの結果(9月実施)

(1) 児童の実態把握

本研究を進めるに当たって、学級に対する満足度、ソーシャルスキルの定着度、学年間の人間関係を把握するために、以下の3つの方法を用いることにした。

	1組(28名)	2組(29名)
学級生活満足群	13人	12人
非承認群	4人	2人
侵害行為認知群	7人	2人
学級生活不満足群	3人	8人
要支援群	1人	5人

ア 楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U(以下Q-U)

右の表1から、1組、2組共に要支援群に位置している子どもがいた。その中で、特に日常生活の様子から考えて孤立しがちな2名を抽出し(抽出児A・B)変容を追うことにした。

イ 学校生活で必要とされるソーシャルスキル尺度

表2 ソーシャルスキル尺度質問項目

学校生活で必要とされるソーシャルスキル尺度(表2)を用いて調査を行った。その結果、学年全体で配慮のスキル得点の低い子(学級平均得点以下)が8名、かかわりのスキル得点の低い子が18名いた。この子どもたちに共通して活用できていないスキル項目を「」で示した。この結果から、相手の気持ちを考えずに行動する姿、自分の気持ちを表に出すことに抵抗を感じている姿が浮き彫りになった。

番号	質問項目
1	失敗した時にごめんなさいと言う。
2	何かをしてもらったときありがとうと言う。
3	友達のまじめな話をひやかさないで聞く。
4	話を最後まで聞く。
5	友達の失敗を許す。
6	腹がたっても「カーッ」とした態度はとらない。
7	みんなで決めたことには従う。
8	係の自分の仕事は最後までやり遂げる。
9	友達の秘密はだれにも話さない。
10	友達との約束は守る。
11	友達が何かをうまくしたとき、ほめている。
12	元気がないときは励ましている。
13	友達の気持ちを考えながら話している。
14	相手が傷つかないように話している。
15	何かを頼むとき、相手の迷惑を考える。
16	友達とけんかしたとき、自分の非も考える。
17	自分にしてもらいたいことを友達にもしている。
18	悩みを話してきたときじっくり聞く。
19	聞こえる声で話す。
20	みんなと同じくらい話している。
21	身振り手振りで気持ちを表す。
22	おもしろい時声を出して笑う。
23	自分から遊びに誘う。
24	初めて会った人とも話をする。
25	みんなのためになることは自分で見つけて実行する。
26	楽しくなるように盛り上げている。
27	何をして遊ぶかアイデアを出している。
28	係の仕事をするとき、意見を出している。
29	自分だけ意見が違っても自分の意見を言っている。
30	ほかの人に左右されなくて、自分の考えで行動する。

ウ ソシオプロフィール法

大阪大学大学院人間科学研究科の藤本学氏が提唱しているもので、集団内のメンバー全員に、他のメンバーとの二者関係が現在どの程度親密かを5件法で評定させていく方法である。個人プロフィールを作ることにより、集団内(今回は学年全体)における個と個の心的距離、互いの評価のずれを視覚的にとらえることができる。Q-Uで学級生活不満足群の中でも要支援群にいるB児について例示する(図1)。この方法の使用に当たっては事前に藤本氏に承諾をいただいた。

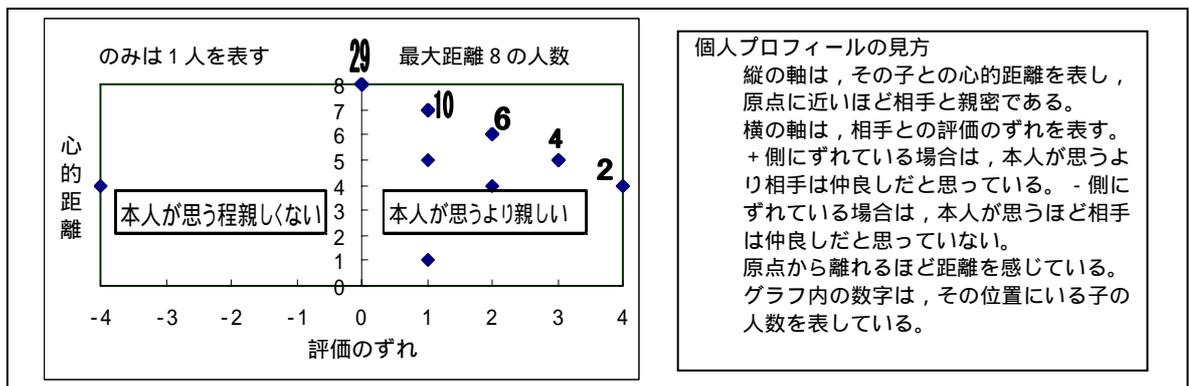


図1 Q-Uで要支援群抽出児Bの個人プロフィール(学年の中で)

B児は、心的距離の近い子が少なく互いに距離を感じている子が多いことから孤立しがちな子であることが分かる。また、評価のずれが+側に偏っていることから、周りの子は、この子とは仲良しと感じているが、それが本人そう思っていないことやその子の自信のなさ、他者理解の不足からB児が周りの子を受け入れることができずにいることが考えられる。

(2) 研究の全体構想

図2に示すように、まず、子どもたちの交流の様子、学級の状態、ソーシャルスキルの活用について調査し、実態を把握する。交流の少ないクラス間では、感情の交流が少なく、人間関係を築くきっかけが少ない。学年におけるソーシャルスキル教育を行う場合、スキル活用がしやすくなるように、まず、感情の交流を図ることが必要である。そこで、SGEのエクササイズから感情の交流を促進するもの、自己肯定感を高めるもの、他者理解につながるものを選択して実施する。更に、いろいろな友達との交流のきっかけを得た子どもたちに、配慮のスキル、かかわりのスキルの内容を含むソーシャルスキル教育を実施する。学習したスキルを活用することにより、友達との交流が促進され、他者理解が深まり、よりよい人間関係へつながると考える。

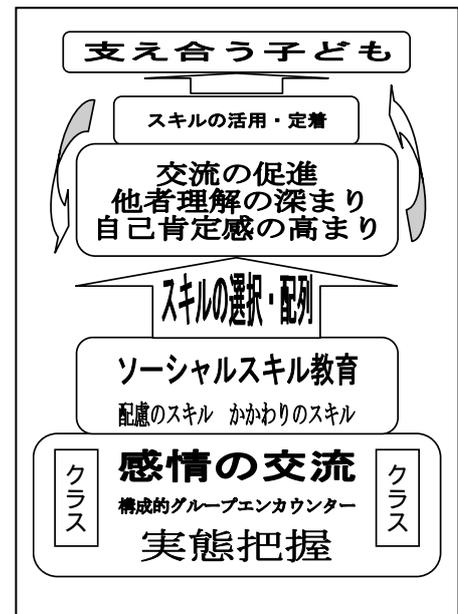


図2 研究の全体構想

(3) ソーシャルスキル教育

ソーシャルスキル教育とは、学校において良好な人間関係を作り保つために必要な知識や技能を身に付けさせるためのトレーニングを行うことである。学年全体に実施する上では教師間の共通理解など様々な配慮が必要であるが、実践する上での具体的な配慮を示す。

ア SGEの活用

学年全体にソーシャルスキル教育を行う前に、集団内に感情の交流を図り、スキル活用がしやすくなるためにSGEを活用する。エクササイズは、自己肯定感を高めたり他者理解を深めたりするものを選択する。

表3 学校で身に付けさせたいソーシャルスキル

イ スキル選択と配列の順序

子どもの実態を基に、学校で身に付けさせたいソーシャルスキル

初級	あいさつ、自己紹介、上手な聴き方、質問する
中級	仲間の誘い方、上手な断り方、仲間の入り方、あたたかい言葉掛け
上級	やさしい頼み方、自分を大切にする、トラブルの解決策を考える、気持ちを分かって働き掛ける

初級・中級・上級の分類は参考文献を基に行った。

(表3)の中でも、関係作りを始める際に必要なスキルについて幾つか選択する。その中でもスキルの活用が分かりやすい初級から始める。視線や体の向き、表情などこれまで意識してこなかったことを意識させるねらいがある。その後、人間関係を形成する上で友達への働き掛けがより多く必要となるスキルを選び、スキルの内容が関連するものを組み合わせて配列する。つまり学習したスキルを次の学習へ生かしやすいようにする。

ウ 活用の意欲を高める

ソーシャルスキル教育は、具体的な行動ができるようになることを目標としている。そこで、スキル内容を「名人の技」として提示し、子どもたちが意欲的に活用していけるようにする。場面は実際の生活場面を設定し、教師の役割演技を通して具体的な行動の姿を示す。良い例、悪い例を比較することで、反応の仕方によって相手が受ける気持ちに違いがあることをより実感させる。

エ 定着のために

ソーシャルスキルを授業の中だけで定着させることは難しい。そこで、日常場面でも活用を促すホームワークを1週間程度設定する。ソーシャルスキルの視点をもった集団内で、学習したスキルを繰

り返し活用させることで、同じ基準での確な評価を与え合うようになりスキルが定着していく。その際に簡単なチェックシートにスキルの活用具合を自己評価させたり、かかわりの少なかった友達に対する今の気持ちについて尋ねたりすることで、交流意欲、スキル活用の意欲をもたせるようにする。

6 研究の実際 2 (授業を通しての検証)

(1) 検証授業 1 (第 1 時)

ア 授業の流れと手立て 「カムオン」 ねらい:【交流の促進】

学 習 活 動	教 師 の 働 き 掛 け と 手 立 て
1 グルーピング	同クラス, 同性の2人組 異クラスを含んだ4人組 8人組へ段階的に
2 エクササイズ	チーム対抗で行うが, ジャンケンをするときに不安にならないように, チームの他の子どもたちに, しっかり応援してやろうという意識をもたせる。
	リレー形式で行い, 次の人と交代するときには手と手でタッチする。
	楽しい雰囲気の中で行えるようにする。
3 シェアリング	全体シェアリングで話が出やすいように, 始めにグループ内でのシェアリングを行い, その後全体シェアリングをする。

イ 考察

学年合同で行う初めての活動であったので, グルーピングを段階的に行った。身体的接触を伴うエクササイズを取り入れることで, 子ども同士の心的距離を縮め, 交流のきっかけになることをねらった。その結果, 資料 1 の感想にも表れているように, 子どもたちの活動に対する抵抗を少なくすることができた。チームのメンバーや周りの友達への気付きも見られ, SGE によってソーシャルスキル教育の土台となる交流の促進, 他者理解のきっかけにつながったと思われる。

資料 1 1 時目の振り返りシートより

1組と2組といっしょにしてどんなことを考えましたか
・最初に「え～」と思ったけど, してみれば面白かった。
・普段あまり遊ばない友達といっしょにできて面白かった。またしたいなと思った。
・ちゃんと初めてしゃべった。
・君が楽しい顔だった。
・走らせてしまったけど, みんなが笑ってくれてよかった。
・これから遊ぶ機会があったら遊びたいな。

(2) 検証授業 2 (第 5 時)

ア 授業の流れと手立て 「めざせ断り方名人」 ねらい:【ソーシャルスキル「上手な断り方」の定着】

学 習 活 動	教 師 の 働 き 掛 け と 手 立 て
1 インストラクション	前時のホームワークの感想や気付きから, 断り方によっては誘った相手が受ける気持ちに違いが出てくることに気付かせる。 断ることは悪いことではないことを理解させる。
2 モデリング	子どもたちが実際にした断り方の中で, 誘った側が悲しい気持ちになる悪い例とまた誘ってみようと思う良い例を, 教師の役割演技で示す。断り方が上手になると安心して誘うこともできることを理解させる。 役割演技をするときには, 悪い例と良い例の比較によって子どもたちがスキルの要素を見付けやすいように場面設定を同じにする。
3 リハーサル	スキルに慣れさせるため, 教示した断り方を, 同じ場面, 同じ言葉で交互に練習させる。 グルーピングは, 模倣程度のリハーサルを同じクラス同性の2人組で, 実際の場面に近いリハーサルを異クラス3人組で行う。
4 フィードバック	誘う役, 断る役, 断り方をチェックする役に分かれ, 交互に練習させる。断るときの理由はあらかじめ例示しておき, それを子どもに選択させて練習を行う。
5 定着化	リハーサルを行ったグループで感想を出し合わせる。 日常生活場面や教科の学習においてスキル活用を促す。

イ 考察(第 3・4・5 時)

第 3 時で初めて意識的に聴く体験をさせたが, 資料 2 の子どもの感想から, 聴くスキルを活用することで, 話している相手に対する理解へとつながっていることが分かる。つまり, スキルの定着が, 他者理解につながっていることが考えられる。

誘う行為と断る行為は密接に関連していることから第 4 時で誘い方の学習, 第 5 時で断り方の学習, 第 5 時で断り方の学習を行い, 交流の促進を図った。次頁図 3 に, 断り方を学習する前後で, 子どもたち

資料 2 3 時目のワークシートより

聴き方を学習しての感想	
・	君(抽出児 B)は話しくいかなと思っていただけと意外と話しやすかった。
・	相手の表情を見ると話すことが少しずつ分かった。
・	話していて気持ちいいと思った。
・	話し方がうまいなあ。
・	「そがんことあった」と思った。
・	相づちをうったりうなずいたりしながら聴くと, 相手の人がうれしい顔になっていた。
・	自分のためにもなるし, 相手のことも分かるし, 相手の心を気持ちよくするという考えた。

が誘った相手がどのように変わったかを示す。この学習の後、これまであまりかわることの少なかった子どもたちに対してもかわろうとする気持ちになったことが見て取れる。誘うスキルと合わせて断るスキルを学習したことで、集団内に「誘っても相手から傷付けられないという安心感」が生まれ、このような結果になったのではないかと考える。中には友達からの誘いを初めて断ったという子もいて、自分の気持ちをはっきりと伝えるという体験にもなった。

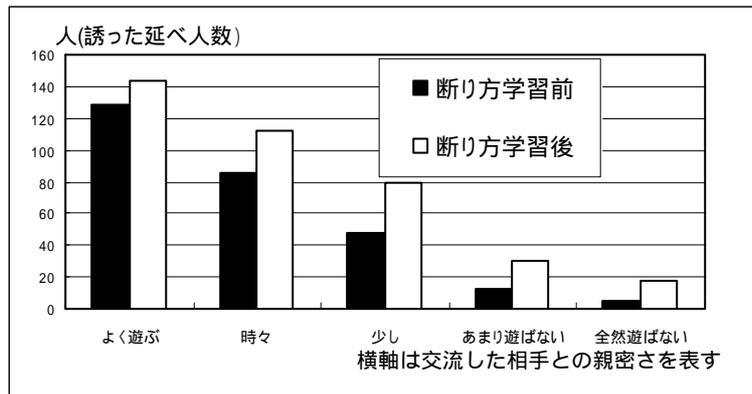


図3 断り方を学習する前後に交流した相手の変容

(3) 全体の考察

ア ソーシャルスキルの定着（検証の視点）

9月に使用したソーシャルスキル尺度を用いて、スキル活用の変容について再度調査した。その結果、30項目中24項目について学年平均得点の上昇が見られた。配慮のスキル項目は2つを除くすべての項目で上昇しており、学年全体に配慮のスキルが定着していると言える。つまり、相手の気持ちを理解し、相手が傷付かないように話すことができるようになったと思われる。一方かわりのスキルでは、身振り手振りで気持ちを表したりおもしろいとき声を出して笑ったりする項目が上昇していることから、自分の気持ちを表に出せるようになってきていることが分かる。ただ、楽しくなるように盛り上げることや、自分の考えで行動するについては低くなっていることから、まだ学年全体の子どもにかわりのスキルが十分定着しているとは言えない。今後もソーシャルスキル教育の継続が必要である。

イ 他者理解と交流の促進（検証の視点）

断り方学習後の感想に「これで用事があるとき悲しませないで断れるから習ってよかった」「断ることも大事だ」とある。これまで子どもたちは、誘われても断り方を知らず、自分の気持ちも思うように言えずにいたが、このソーシャルスキルを身に付けたことで、相手から理解してもらえる、自分の気持ちを表しても責められないという安心感が生まれたと考えられる。それが、「断るときに使います」「どんどん使えそう」という言葉に表れている。

ウ Q-Uの変容

表5に示したように、Q-Uにおける要支援群の子どもが6名から1名になった。スキルの定着に

表4 ソーシャルスキル活用の変容

番号	質問項目	9月	2月	増減
1	失敗した時にごめんなさいと言う。	3.11	3.30	
2	何かをしてもらったときありがとうと言う。	3.51	3.65	
3	友達のまじめな話をひやかさないで聞く。	3.21	3.46	
4	話を最後まで聞く。	3.34	3.39	
5	友達の失敗を許す。	3.42	3.49	
6	腹がたっても「カーッ」とした態度はとらない。	2.73	2.95	
7	みんなで決めたことには従う。	3.32	3.42	
8	係の自分の仕事は最後までやり遂げる。	3.26	3.29	
9	友達の秘密はだれにも話さない。	3.62	3.58	
10	友達との約束は守る。	3.56	3.63	
11	友達が何かをうまくしたとき、ほめている。	3.53	3.58	
12	元気がないときは励ましている。	3.30	3.39	
13	友達の気持ちを考えながら話している。	3.11	3.34	
14	相手が傷付かないように話している。	3.16	3.30	
15	何かを頼むとき、相手の迷惑を考える。	3.29	3.33	
16	友達とけんかしたとき、自分の非も考える。	3.04	3.14	
17	自分にしてもらいたいことを友達にもしている。	2.85	2.92	
18	悩みを話してきたときじっくり聞く。	3.39	3.35	
19	聞こえる声で話す。	3.28	3.47	
20	みんなと同じくらい話している。	3.11	3.18	
21	身振り手振りで気持ちを表す。	3.18	3.39	
22	おもしろい時声を出して笑う。	3.63	3.68	
23	自分から遊びに誘う。	3.56	3.46	
24	初めて会った人とも話をする。	3.24	3.00	
25	ためになることは自分で見つけて実行する。	2.53	2.74	
26	楽しくなるように盛り上げている。	2.88	2.81	
27	何をして遊ぶかアイデアを出している。	2.65	2.93	
28	係の仕事をするとき、意見を出している。	2.70	2.76	
29	自分だけ意見が違ってても自分の意見を言う。	2.65	2.70	
30	他の人に左右されないで、自分の考えで行動する。	3.13	2.95	

数値は学年の平均得点(4点満点)

資料3 断り方の学習後の感想

断り方の学習をしてどんなことを考えましたか

- ・これで用事があるとき悲しませないで断れるから習ってよかった。
- ・理由を言えなかったのが言えるようになった。
- ・断ることも大事だと思った。
- ・人の気持ちを考えた。
- ・断るのが初めてだったので理由が難しかった。
- ・断られても理由を言ってくると悲しくない。
- ・どんどん使えそう。また友達を誘おうと思った。

表5 Q-Uの変容

	1組(28人)		2組(29人)	
	9月	2月	9月	2月
学級生活満足群	13人	10人	12人	10人
非承認群	4人	5人	2人	3人
侵害行為認知群	7人	10人	2人	7人
学級生活不満足群	3人	3人	8人	8人
要支援群	1人	0人	5人	1人

よって、要支援群の子とのかかわりが多くなり、その子たちへの理解が深まったのではないと思われる。その他の群は望ましい変容は見られなかったが、表6に示すように承認得点は上昇している。これは、互いのかかわりの中で他者理解が深まってきたことの表れであると思われる。

表6 Q - Uにおける承認得点の変容

学級平均	9月	2月
承認得点	16.7	18.0

(満点は24点)

エ 個人プロフィールの変容

抽出児A児の個人プロフィール(図5)を見ると、自分と友達との心的距離の評価のずれの幅が小さくなっていることが分かる。これは、互いの理解が深まったことで、相手にいだけ親密さが一致してきたと考えられる。A児に対する心的距離も最大の距離(8)に位置していた子が学年全体で17名から10名へと減少していることから、A児と周りの子どもたちの心的距離が近付いたことが分かる。ソーシャルスキルを身に付けたことで、A児への交流意識やA児自身の交流意識が高くなってきたことの表れであると思われる。

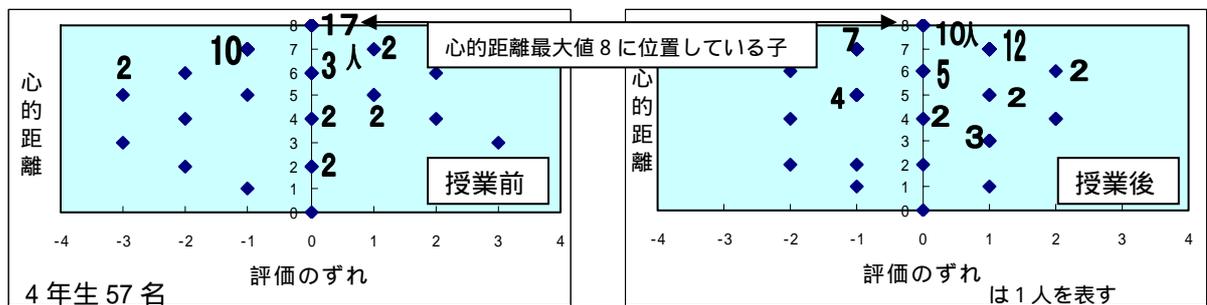


図4 抽出児Aの授業前と授業後の個人プロフィール (内の数字は人数を表す)

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 子どもの実態を基に、学年全体にS G Eで交流のきっかけを作り、更にソーシャルスキル教育を行うことは、様々な友達へのかかわりを容易にし、より多くの人間関係を築くことに有効であった。

イ ソーシャルスキルの定着は、交流を促進させ多くの人への関心を高めるとともに、今までかかわりの少なかった友達への理解を深めさせることになった。

ウ ソーシャルスキル教育年間計画作成上の留意点として以下のことを考えて作成した。

(ア) スキル定着の程度を把握した上でスキルの選択と配列を考える。

(イ) その時期で重要なスキルは、場面を変えたり相手を変えたりしながら繰り返し実施する。

(ウ) 学期の始めは、配慮のスキルで関係づくりの第一歩であるあいさつを配列し、少しずつ交流の対象を広げていくようにする。

(エ) スキル内容が関連するものは、組み合わせて実施する。

(2) 今後の課題

ア 学年全体への指導を1単位時間で行ったが、子どもたちへのフィードバックを十分に行えなかった。今後は、より効果的な指導方法の在り方について研究を進めていきたい。

イ 今後、学校におけるソーシャルスキル教育はますます大切になってくるとと思われる。この実践にとどまらず子どもの実態に応じて、適切にソーシャルスキル教育を行う手立てを工夫していきたい。

《参考文献》

- ・ 國分 康孝監修 『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校』 1999年 図書文化
- ・ 藤本 学著 「ソシオプロフィール法 - 関係性の親密さから見る小集団の構造 - 」 2004年 『大阪大学大学院人間科学研究科 対人社会心理学研究 4』